

旭川放水路（百間川）と岡山市街地の発展

～約300年続く治水のストック効果～



おおた 学*
大田

岡山市街地を流れる旭川は、市街地上流で旭川放水路（百間川）に分流している。この旭川放水路は約300年前の江戸時代に築造され、近年の河川改修は令和元年に完成した。岡山市街地の礎は岡山城下であり、江戸時代から旭川放水路（百間川）の治水効果は市街地の発展に大きく寄与している。また、放水路により岡山後楽園・岡山城周辺の河川改修による大規模な改変を減らし、水辺空間の保全にも寄与している。

1. はじめに

岡山県中央部に位置する旭川は、真庭市^{まにわしひるぜん} 蒜山^{あさなべわしがせん}の朝鍋^{あさなべわしがせん}鷲ヶ山^{ひやっけんがわ}に発し、下流部で旭川放水路である百間川を分派した後、岡山市中心部を貫流して児島湾に注ぐ、流域面積1,810km²、幹川流路延長142kmの一級河川である。旭川の放水路である百間川は、承応3年（1654）の大洪水を契機に、岡山城下を守るため、岡山藩に仕えた熊沢蕃山^{くまざわばんざん}が越流堤と放水路を組み合わせた「川除けの法」^{かわよ}*を考案し、岡山藩郡代の津田永忠^{ついでながただ}により岡山城から数km上流の旭川左岸から分流する百間川が築造され貞享4年（1687）頃に概成したと伝えられている。近年の河川改修は昭和49年から本格的に着手し令和元年6月に事業全体が完成した。

岡山市街地は約300年前の江戸時代から旭川放水



写真-1 百間川と岡山市街地

路（百間川）（以下、「百間川」という。）の治水のストック効果の恩恵を受け発展してきたのである。

2. 岡山城下と旭川

1) 戦国時代から江戸時代

戦国時代の終わりの頃、広大な岡山平野のデルタ地帯に「岡山」、その西隣に「石山」、さらにその北西には「天神山」の3つの丘があり、その石山にあった石山城に宇喜多直家（1529～1581）が入城・改築し、後に宇喜多秀家（1572～1655）が隣接する岡山に新たに本丸を設け、石山城を取り込む形で岡山城の城郭を建造した。そういった築城の経緯から岡山城の西側の守りは盤石だったが、東側は薄かったことから、幾筋かに別れていた旭川をまとめて天然の堀として城の東側を流れるよう付け替えたとされている（写真-2）。ところがこの形は、北側から旭川が岡山城にぶつかるような形で、更に急カーブを描いて城の東側に沿って流れるため、岡山城周辺で水の流れが乱れやすく、洪水の勢いを受け、溢れやすい場所となり、その後、幾度となく洪水に見舞われることになる。最大の洪水被害は承応3年（1654）の洪水で、この洪水を受けて計画されたのが百間川である。

承応3年（1654）の洪水以後、岡山藩郡代の津田永忠により、岡山城から数km上流の旭川左岸堤防に荒手と呼ばれる越流堤防を設けて城下の氾濫が発

*国土交通省 中国地方整備局 岡山河川事務所 開発調査課長

生する前に上流で強制的に分流する百間川の工事が進められ貞享4年（1687）頃に概成したと伝えられている。

百間川の治水のストック効果もあり、岡山城は、宝永4年（1704）の統計で武家方2.2万人、町方3.1万人、総人口5.3万人あまりを擁し、当地方の軍事、政治、経済、社会、文化、交通の中核機能が集まっていた。

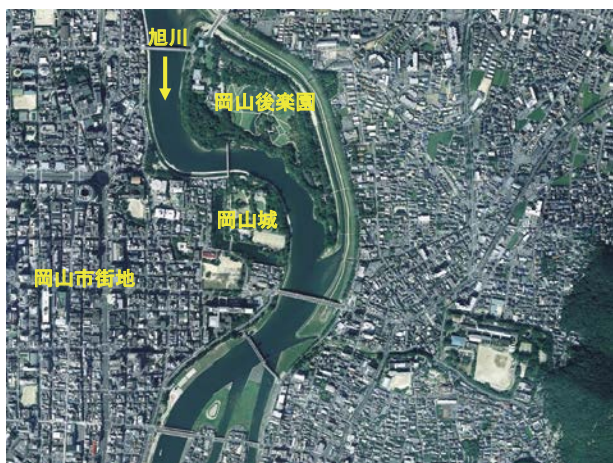


写真-2 屈曲する旭川

2) 昭和40年代～平成・令和

近年の百間川の改修は昭和49年度から本格的な改修に着手し、平成9年度に築堤の概成、平成27年3月に百間川河口水門（平成水門）の完成、令和元年6月に旭川放水路事業の最終工程である分流部の工事が完了し、約半世紀におよぶ百間川の一連の事業が完成している。

広島県・岡山県などで甚大な被害が発生した平成30年7月豪雨時は百間川が概成していたことから、旭川の大管管理区間と百間川沿川に外水による浸水被害は発生しなかった。



写真-3 百間川分流状況（平成30年7月）

3. 百間川の効果

1) 平成30年7月豪雨

平成30年7月5日から7日にかけて梅雨前線が

本州付近に停滞し、前線の活発な活動が続いたため、旭川流域でも断続的に非常に激しい雨が降り、多いところでは降り始めからの累加雨量が400mmを超過した。旭川大臣管理区間の治水基準地点である下牧上流域の雨量は363mm/2日となり、既往最大降雨である昭和47年7月洪水の269mm/2日を上回る降雨を記録し観測史上最高水位を記録している。

百間川は平成29年11月に旭川と百間川の分流部の「一の荒手」の改修に着手し令和元年6月に完了したが、概成した状況で平成30年7月豪雨を迎えている。この洪水で百間川が無かった場合に、岡山市街地の約180ha及び約3,300戸の家屋の浸水被害が発生するおそれがあったが、洪水を分流したことによって、旭川の水位を約1.3m低下させ、洪水を安全に流下させることができた（図-1）。

平成30年7月豪雨と同規模の平成10年10月洪水では、岡山市内の中島地区において家屋浸水被害が発生したが、平成30年7月豪雨では百間川も概成していたことから、治水のストック効果により旭川の大管管理区間と百間川沿川は外水による浸水被害の発生は無かった。

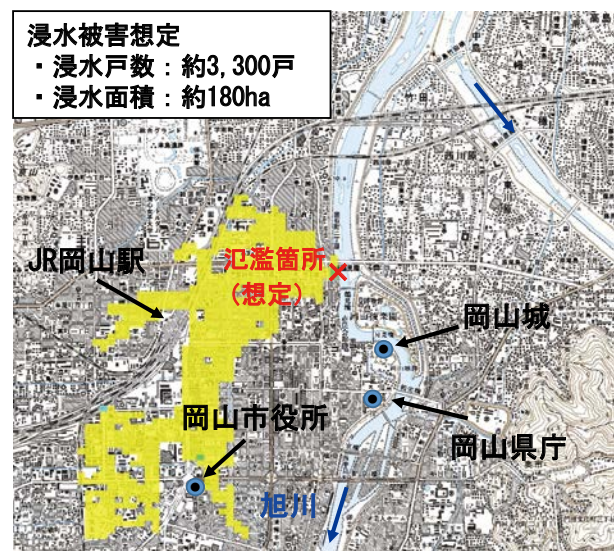


図-1 百間川が無い場合の想定浸水範囲

4. 岡山市街地の発展

1) 市街地の再開発

百間川の治水効果、旭川本川の河川改修の効果により、第2次世界大戦後の洪水では岡山市街地に外水による浸水被害は発生していないこともあり、旭

川右岸側の市街地では岡山駅を中心に都市の再開発事業が盛んに行われてきた。現在も岡山駅前一丁目2番3番4番地区市街地再開発等の4事業が行われている。

2) 岡山中心市街地の活性化

岡山市街地の再開発事業とあわせて、民間事業者の大規模開発も相次いでいる。最近では、平成26年12月、岡山市街地中心部に中四国最大規模の大型商業施設の出店があり、JR岡山駅から近く地下道で直結していることから、駅周辺は大いに賑わっている。商業施設以外では、大規模物流センターが令和4年6月に稼働開始を予定している。市街地再開発事業と活発な民間事業者の開発の相乗効果もあり、岡山市街地中心部の人口は2003年～2021年にかけて約15%増加している(図-2)。

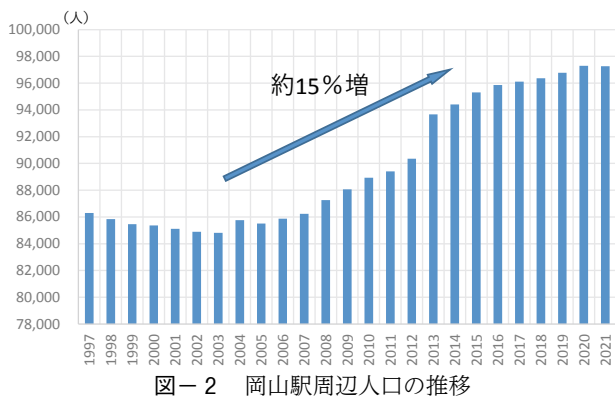


図-2 岡山駅周辺人口の推移

5. 百間川の間接的な効果

旭川と百間川の分流部は岡山市街地より上流部に位置しており、河道への配分流量は、旭川本川は4,000m³/s、百間川は2,000m³/sを計画している。すなわち、分流部より下流の旭川本川は2,000m³/分の洪水を流下させる断面を百間川の建設により減じることが出来たのである。岡山市街地は岡山城の築城とともに現在の市街地の礎が築かれ今日まで発展しており、過去から旭川のすぐ近くまで開発がなされている。津田永忠などの先人が百間川の整備に着手したことにより、現在の河川改修では市街地の大規模な引堤を回避できたとも言える。また、旭川の右岸側には岡山城、左岸側には日本三名園の一つである特別名勝の岡山後楽園があり、百間川の効果

により岡山後楽園や岡山城に大きな影響を与えることなく旭川本川の河川改修を行うことが出来たのではないだろうか。

百間川によって、より洪水からの安全性が高まる本川側については、岡山城・岡山後楽園周辺の近年の観光客数の伸びが示すように、観光地として活性化している(図-3)。現在、国と岡山市が連携して基盤整備を進めているが、その1つが、岡山後楽園の東側を流れる東派川の「旭川さくらみち」の整備、旭川本川の高水敷を散歩できる「旭川おしろみち」の整備である。今年はいよいよ新型コロナの関係でイベント等は中止されたが、例年4月のお花見の時期には多くの方々が訪れて花見を楽しまれており、市街地にいながら岡山の自然文化に触れる魅力的なスポットになっている(写真-4)。

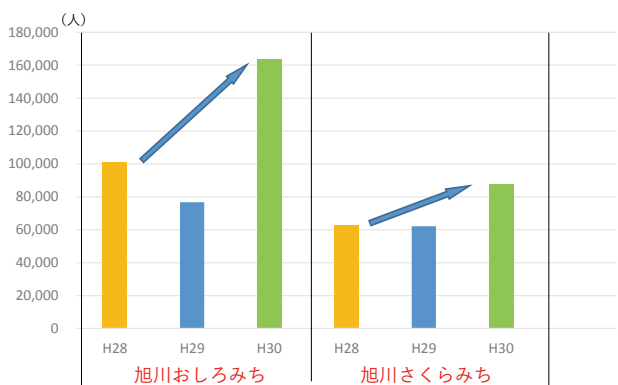


図-3 旭川さくらみち、旭川おしろみちの年間利用者数(推計)



写真-4 旭川さくらみち

【用語解説】

※川除けの法：一定量を超えた旭川の水を荒手堤を超えて百間川側へ流出させ、岡山城下を洪水から守る方法

【著者紹介】 大田 学 (おおた まなぶ)

平成4年度建設省入省(土木職)。国土交通省中国地方整備局河川部等に勤務、出雲河川事務所尾原ダム管理支所長を経て現職。